

療養所の思い出

中学・高校と通った学校には「奉仕の日」というのがあって、福祉施設に手伝いを兼ねた慰問に行っていた。その行き先のひとつに、ハンセン病の療養所があった。

一九七〇年代後半の当時、かつて不治の病といわれたハンセン病も、医療の進歩により、治る病となり久しかった。その程度の知識はあっても、ではなぜ、まだ療養所があるのか、そこに入所している方がたくさんいるのか、深く考えることもしなかった。

療養所には、まだ満足な治療方法がない時代に発病し、目が見えなくなったり、手足の変形といった重度の後遺症を抱えたお年寄りが暮らしていた。にこやかに部屋に招き入れてくださる方々に、どう振る舞っていいのか、わからなかった。指を失ったおばあさんの手を握り、話しかける友人の脇で、何もできなかった。おだやかな日差しに包まれた部屋の景色だけが、唸りに焼き付いた。

去年から今年にかけて母校の行事に関わり、学校の歴史をあらためて知る機会があった。前身の私立小学校は百年前に創設されて、初代校長は、日本で初めてのハンセン病療養所の第六代院長でもあった。その小学校は、地元の子どものほか、親がハンセン病にかかり離れ離れにならなければならなかった子どもたちの、就学の間でもあったと初めて知った。

そんなこともあり、この春、東村山市にある国立ハンセン病資料館を訪ねてみた。誤った隔離政策が続いたハンセン病の問題を、歴史をたどる展示を通して伝え、正しい情報を発信している場だ。

ハンセン病は永いこと、誤った認識のまま、伝染病としておそれられた。病そのものだけでなく、世間の偏見と差別が、病気にかかった人とその家族を苦しめた。いったん発病したら、強制的に療養所に入れられ、生涯そこを出られない時代があった。

必要のない隔離政策が続いた原因となった、らい予防法が廃止になったのは一九九六年という。あまりに最近のことで驚いた。そして、今日まで自分がその事実を知らなかったことも、ショックだった。

生きていけば、誰しも病にかかる。その病を自分のこととして考えない限り、そこに起る問題は解決しないと教えてくれたのは、認知症の取材をしたときに出会った医師だ。人が人らしく生きて死んでいくことを難しくしているのは、病そのものではなく、病んだ人とそうでない人を区別して、自分がいかにそうでない人の側でいられるかに必死になる心のうちにある。

新型コロナウイルス感染症という新しい病について、日々報道される数字に一喜一憂する日常が続いている。病を数字だけでとらえることに慣れていくうち、わたしたちはまた何かを間違えるのではないか。あの日、療養所でにこやかに迎えてくれた人たちの人生は、それぞれかけがえのない、たったひとつのものだったはずだ。(S)